

つちたま職人のまなざし

日吉町生涯学習センター（日吉町保野田）の美術工作室で定期的に行われている「京のつちたま」教室。つちたま作りは、南丹市、亀岡市、京丹波町の9つの就労支援事業所で取り組まれており、その輪は徐々に広がりを見せています。教室には、各事業所から通所者やスタッフが集まり、京都伝統工芸大学から来られる指導者に技術を学びます。そしてその技術を持ち帰って日々の作業に生かします。土のこね方、金具の取り付け方、それは、はた目から見ても素人には難しい職人技。しかし、意外にも土を丸める作業が難しい。ちよつとした力の込め具合に



▲教室で技術を学ぶ「京のつちたま」職人たち



▲作業を進める中西さんのまなざしは職人そのものです

よって、いびつな形になってしまいます。なかなかきれいな丸にはなりません。根気よく転がして、角を取って丸く仕上げます。

この「京のつちたま」職人には、車いすで生活をしている人や片手しか使えない人などさまざまな障がいのある人がいます。

京都太陽の園に通う中西隆男さん（園部町）は、子どもころの高熱が原因で脳性まひになったとのこと。首にタオルをかけ、汗をかきながら器用に土を丸めたり、穴を開けたりされます。

「普段は印刷部門の会計を担当しているので、精神的なプレッシャーと責任で心理的にしんどい時もあります。でも、この『つちたま』作りをしているときは無心

になって作業ができます。そして、その後も集中ができて、お金の計算もしやすくなるんです」と話す中西さん。「自分たちが作った作品を持っている人を見たら、『お、仲間がおる！』とうれしくなりますよ」と、ちよつと照れくさそうに微笑み、また真つすぐなまなざしを手元に戻して作業を進められました。

片方の手に障がいのある女性は、もう一方の片手で手元も見ずに土を丸められます。「見なくても丸くできるのですか？」と尋ねると、「見ても見なくても一緒。指先の感覚で、形がおかしいところは分かるもの」。さすが、その女性のつちたまはきれいに整った丸形に仕上げられていました。

「京のつちたま」ができるまで

①こねる
「菊ねり」というこね方で粘土をしつかりとこねます。土には発色するように顔料が練り込まれます。



②丸める
小さいものや大きいもの、少しずつ表情の違う玉が丁寧に丸められます。

③穴あけ
丸められた玉の中央に針金で穴を通します。この穴に金具が取り付けられることとなります。

